

田んぼのレベル強化！

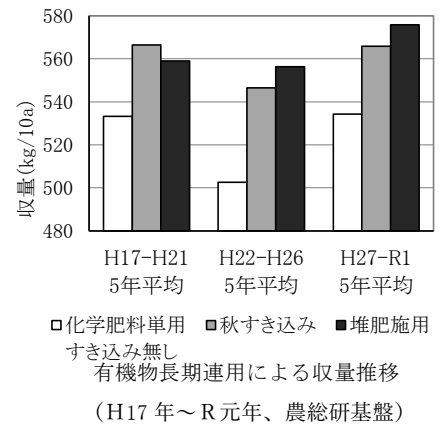
秋すき込みで異常気象に負けない稲づくり

1 稲わら秋すき込みにより腐熟促進

稲わらの秋施用は、堆肥と同等の「土づくり」効果が期待

稲わらの腐熟促進のため、秋すき込みは気温が高い
10月中に行いましょう。

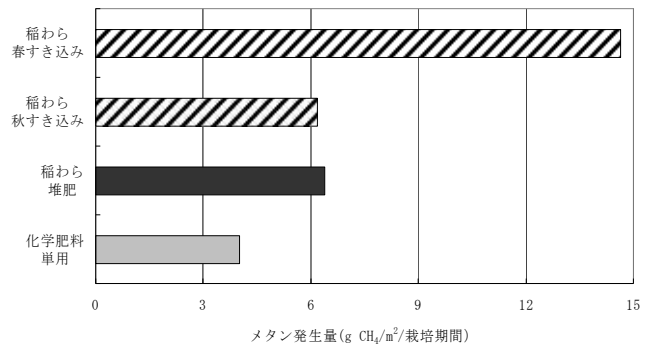
稲わらの分解を促進する**腐熟促進剤**等も有効です。
秋すき込みの耕深は5～10 cm程度の浅うちにしまし
よう



春すき込みはワキの発生により根腐れが懸念される

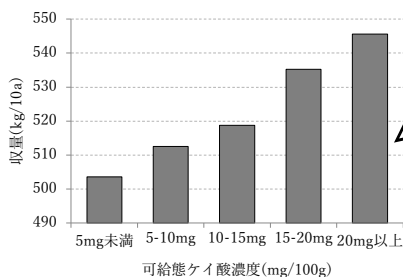
春に稲わらをすき込むと、温室効果
ガスであるメタンや根腐れの原因と
なるワキ（硫化水素）の発生が多くな
ります。秋すき込みで腐熟を促進させま
しょう。

水田からのメタン発生量に対する稲わら処理の影響
(H5年 新潟農試)



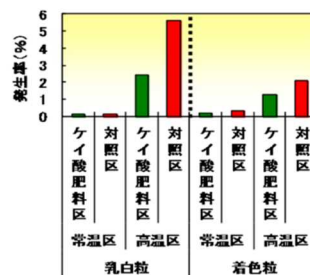
2 同時にもみ殻やケイ酸質を施用しましょう

ケイ酸質の施用は、受光態勢や根の活力を向上させ、倒伏防止や茎葉温度の低下等
の高温対策としても有効で、品質や食味の向上に効果的です。



ケイ酸濃度が高いほど
収量アップ

可給態ケイ酸濃度と
コシヒカリの収量
(湛水静置培養)
(H6～H27年、農総研基盤)



ケイ酸質資材の施用により
高温年の玄米乳白粒及び
着色粒の発生率が低下

図2 高温条件におけるケイ酸施用が玄米品質に及ぼす効果
(「金田ら、日本土壤肥科学雑誌第81巻、2010」より引用)

もみ殻の施用量は、その水田から得られた量（概ね 120 kg/10a）を基本に、最大でも
250kg/10a までとしましょう。

ごま葉枯病、稲こうじ病、墨黒穂病が多発したほ場のもみ殻や、雑草種子の混入が多
いもみ殻は施用しないようにしましょう。